

イスラーム世界とグローバル化 国民国家体制の超克と新カリフ制の台頭

緒 言

中田 考

今から半世紀前、日本の比較文明学者、故梅棹忠夫は、西欧と日本を除く旧世界には中国世界、インド世界、ロシア世界、地中海・イスラーム世界という4つの自己完結的な単位があり、近世になって清帝国、ムガル帝国、ロシア帝国、トルコ帝国の支配下でそれぞれの国家構造が完成したと考えていた。梅棹によると、西欧による植民地支配が終わった後、これらの世界はおのおの再建への道を歩み出したが、その中で最も事態が遅れているのが地中海・イスラーム世界だという。

21世紀の今日、グローバリゼーションの時代を生き残るために、地域ブロックの形成や再編に向けた動きが世界中で活発化している。たとえばEUでは2009年11月に欧州理事会の常任議長が選出された。アフリカでさえ、2010年7月にケニア、タンザニア、ウガンダ、ブルンジ、ルワンダの5カ国が東アフリカ共同体共同市場を発足させ、連邦政府樹立に向けた一步を踏み出している。国際社会が地域統合・再編を進める一方で、こうした動きに後れを取っているのがイスラーム世界である。そうした中、2011年の「アラブ革命」は、領域国民国家制度の下で分裂を余儀なくされていたアラブ世界が、実は文化的、社会的、政治的に強く結束していたことを改めて浮き彫りにしたのである。

近年、イスラーム世界はついに再統合の兆しを見せ始めている。筆者はこの動きを仮に「新カリフ制」と呼んでいる。まず最後のカリフ国、オスマン帝国を前身とするトルコ共和国の内情を見てみよう。トルコ共和国はカリフ制を廃止し、世俗的な国家政策に移行しているが、首相と大統領の座は、事実上のイスラーム政党である公正発展党（AKP）が占めている。この政党は憲法改正を行ってイスラーム政府実現に向けた布石を打つとともに、周辺諸国との外交関係の改善を着々と進めている。特筆すべきは、パレスチナ問題解決のためにガザ地区に向かうトルコの支援船をイスラエル軍が攻撃した事件である。この一件を機に中東イスラーム世界におけるトルコの存在感は一気に高まった。今後トルコは中東地域のリーダー的役割を進んで担ってゆくものと思われる。

次にマレー世界に目を向けてみよう。この中でもインドネシアは、イスラーム世界の周辺部に位置していながら、世界最大のムスリム人口を持つ。この国では、スハルト政

権崩壊後の自由化の流れの中でイスラーム政治運動が加速しており、世界唯一の国際イスラーム政治組織である解放党（Hizb al-Tahrir）が合法化されている。また2007年には国際カリフ会議を主催し、10万人の参加者を集めて大成功を収めている。

アラブのムスリム国家がイスラームを国教としているのに対し、トルコとインドネシアはいずれも「世俗的な」非イスラーム国家であり、公的領域や政治から宗教を排除することを明確に打ち出している。この事実は極めて重要である。現在トルコとインドネシアで台頭しつつある「新カリフ制」が、西欧の世俗主義との深刻なイデオロギー的対立から生まれたものであり、西欧が提唱する国際秩序および西欧の政治哲学的批判への理解の上に築かれていることを指すからである。

オスマン帝国はイスラーム世界全域を支配するカリフ国家であったが、同時に近世ヨーロッパの国際政治の舞台でも重要な政治的役割を果たしてきた。これに対してマレー世界は、多様な宗教、民族、文化を抱える東アジアの一大勢力である。こうしたことから、現代の世界が文明の共存を実現できるか否かを見極めるためにも、新カリフ制の今後の動向を見守ってゆくことが肝心である。

レザー・パンクハースト氏は、現在のムスリムの政治にとって、カリフ制こそが最善の統治制度であるとして、その理由を次のように述べている。第一に、アイデンティティーが複雑化し、国境をまたぐ労働力や資金の流れが加速している今、国民国家制度はもはや世界のニーズに応える力を失っている。むしろ今求められるのは、多文化的政策を実行することのできる超国家共同体である。第二に、最近の中東の民衆蜂起からも明らかのように、民意は自らが選んだ独立政府と法の統治を求めている。そしてカリフ制こそ、こうした条件を完璧に満たすことができる統治制度にほかならない。

これに対しハミト・ボザルスラン教授は、ムスタファ・ケマル・アタテュルクがカリフ制を正式に廃止した背景について検討を加えた。教授によると、カリフ制は、1924年に廃止された時点ですでに時代錯誤的な制度とみなされていた。当時の議論の焦点となっていたのはトルコ共和国の今後のあり方についてであり、カリフ制の是非はあくまでも副次的な主題にすぎなかったという。

レジェプ・センテュルク教授は、イスラームにおける地球倫理の可能性を、カリフ（*khalifah*）、アーダミーヤ（*adamiyyah* = 人間であること）、ウンマ（*ummah*）の概念を軸に理論的側面から解説した。「カリフ」という言葉は、イスラーム法で定義される「イスラームの家（*dar al-Islam*）」の為政者の地位ではなく、より根源的な「地上における神の代理人」の意味で一貫して使用されてきた。後者の意味での「カリフ」は、クルアーンの中にも登場する。イスラームの世界観では、人間は地上における創造主の「カリフ（代理人）」であるとされ、理性（*'aql*）、信用（*amanah*）、尊厳（*karamah*）を備え

ているが故に他の被造物と差異化される。こうしたカリフとしての特性を持つ人間は、必然的に生命、財産、理性、宗教、家族といった要素を備えた存在となる。

インドネシアから参加したムハンマド・イスマイル・ユサント氏からは、カリフ制とインドネシア解放党への支持が拡大しているという指摘があった。統計データによると、シャリーアの施行やカリフ制の復興、インドネシア解放党の方針に支持を表明する国民の割合は増加している。また多岐にわたる社会機構もインドネシア解放党を支持しており、カリフ制に反対する勢力は徐々に力を弱めている。

グローバル化の時代を迎えた今、世界中のムスリムの間でカリフ制待望論が高まりつつある。オスマン帝国時代のカリフ制にも再考に値する正の遺産が多数存在するが、当然ながらこれをそのままの形で復興することは無理である。

つまり私たちが今必要とするのは、「カリフ制」の新たな概念である。これは全人類に適用でき、領域国民国家制度の牢獄から世界を解放する「法の支配」に他ならない。こうした「新カリフ制」こそ、本当の意味のグローバル化を促進する真の原動力の名に値するのである。